

授業を実際に行なってみて一番感じたことは「予想できないことが多い」ため、授業内容や時間のコントロールが難しいなど感じた。座学教科ではグループワークや思考時間について教員の声掛けで制御でき、また生徒も制御の声掛けがあると、止まる、止めるという流れができていたためより制御しやすいが、実技教科である体育は“習得”ができるまでは生徒の動きを止めづらい。そして隊形変化や用具運搬などの時間を見込んでいたとしても、そのクラスごとの機敏さや授業時限（朝イチは体が動きづらい、午後は疲労もあり動きが遅いなど）によって変わることが容易には予想できず、実習序盤は初週から授業をさせてもらったが指導案通りにできないことが多々あった。これに加えて着替えの時間を見込んだ授業展開を行なうという独自性のあるマネジメントなども予想して、時間の調整をしていた。その中で他のクラスとのグラウンドの兼ね合いや用具の使用について、朝のうちにその日の授業担当者全員に聞きに行き、うまく連携を取ることで、「予想できないこと」に対してカバーすることができていたと考える。また、見えてきたこととして「授業の『軸』を作り上げる＝経験の数が物語る」ことである。自分が学生時代に受けていた指導教官の授業の流れと、実習で観察した指導教官の授業の流れが全く変わっていなかった。その他の体育の授業を行なう教員を観察した際も流れが一定で、つまり現場での経験や場数の多さから作り上げられた『軸』を構築できたらより良い授業ができるし、自信に変わると考える。その点、指導教官からは「最初から上手くていいわけではないし、他の先生たちの追いつこうとしなくていい」と言っていたことがあり、実習での経験を活かして流れを作り上げて、これからの現場で自分のやりやすい流れを作り上げることがまず一つの良い授業をする近道になると考えた。

生徒との交流で学んだことは「名前を覚えていなくても“分からない感”を出さず、とにかく拒まずコミュニケーションを取ること」である。体育教員独自の発見点であると思うが、担当クラスが多く、受け持つ生徒数も多いが、授業内で全員と面と向かって100%のコミュニケーションができないと分かった。この3週間で授業以外の時間に話しかけてくれる生徒がたくさんいたが、生徒は覚えてくれているがこちらは…のパターンがよくあった。全生徒を覚える難しさはもちろん感じたが、その中で「あなたのことは覚えてません」とは感じさせずに「授業疲れた?」「次の授業いつやる?」などととにかく話を広げて、生徒に覚えられていないという不快感をあまり与えないような会話を続けることも、話しやすい教員、授業への積極性に繋がるなど気付いた。そのようなコミュニケーションをすることで、次の授業時に話しかけてくれた子の顔を認識し名前が自然に頭に入ることがあったので、授業時間以外に話しかけてくれる次の機会では生徒を認識できているというのは喜びであった。

職員室の様子や教員の仕事から学んだこととして「自分にプライドを持つこと」である。1年目の先生も20年目の先生も生徒からしたら同じ「先生」であり、頼るものだと考えられているからこそ、自分はその教科のスペシャリストであるという自覚や教員をしながらも日々進化をすることが重要であると感じた。また母校が去年に姉妹校との合併をしたことで、プライドを持った体育教員たちの間でA校で、B校で長年やってきた教員とでのズレや考え方の違いがあるなど感じた。それを声に出すことはなく、小耳に挟んだり、どちらかの教員がボソッとやっているのを聞くことがあり、部外者的な感想として、そのようなズレを統一させ、考え方を一致させることが重要であると感じた。

教育実習全般にわたっての感想として、自分は初週の3日目から実践をし、合計で30以上の回数を行なったが、それもまた教官が「やりたいようにやりなっ」という考えの人だったので、おかげで授業を行う怖さや人前で喋

る度胸は誰よりも付けて帰って来れたと思う。保健の授業では実習内容が明確になった実習前の時点で、内容を追求していたこと、授業資材（プリント・スライド）を揃えていたことは本当に役に立った。授業内容を追求することで取舍選択して教えることが出来た。また私の持ったクラスが帰国子女の生徒などがある国際系のクラスだったため、難しい言葉は常に英語を混ぜて説明した。このような場面で、英語を使う能力がまだ自分にあっただけで対応できたが、国際社会になる今からの時代、もっと極めていこうと感じた。研究授業に見に来ていただいた先生方に講評を聞きに行った際、たくさんのお褒め言葉を頂き、これからの自分の教員人生やその他の生活にも活かしていけるように、日々努力していきたいと思う。